

大

学

2025

09

時

報



No.

424

｜特集｜

未来の自分を描く低年次キャリア教育

日本私立大学連盟

ISSN 0288-1748 2025(令和7)年09月20日発行【隔月刊】

仙台白百合女子大学



ルルド



ステラマリスセンター

「百合の花とルルドとステラマリス」

世界的な注目を集めた2025年の教皇選挙。折しも「希望の巡礼者」の聖年に誕生した新教皇レオ14世は、自らの紋章に百合の花をあしらった。聖母マリアのシンボルだからである。本学が大学名称にも校章にも百合を掲げるのは、設立母体のシャルトル聖パウロ修道女会が聖母を保護者と仰ぐことに由来する。聖女ジャンヌ・ダルクがお手製のフランスの旗にデザインしたのも、聖母を表す百合の花だった。聖母マリアに委ねられた本学の「たから」は、ルルドである。正門をくぐると、小高い丘の上から学生たちを見守るように、マリア像が迎えてくれる。傍らにひざまずく聖女ベルナデッタの像も見える。岩屋内に座って、祈りのひとときをもつことができる。このルルドにはいわれがある。1945年の仙台大空襲で一切を消失した中高校舎の中から唯一、無傷のまま見つかったマリア像は、いかなる試練に遭う時も神の御手が私たちを守り抜くことを想起させた。そのオマージュである大学のマリア像は、不屈

の精神と再生の希望の象徴でもある。ここは、2011年東日本大震災の犠牲になられた健康栄養学科1年生（当時）の遺留品を収めた慰霊の場でもある。彼女をはじめ本学にゆかりのある故人が神の御許で永遠の安息を得ることができるよう祈るとともに、今を生きる私たちが命の尊さに思いを潜めるよう誘われる。

今年センターを新設した福利厚生棟は、聖母マリアの呼び名を冠したステラマリス（海の星）という。古来、人々は聖母マリアを海路の目印となる夜空の星にたとえて、人生の航海を導く希望の光と仰いできた。このステラマリスセンターで展開する地域貢献・高大連携・生涯学習の活動が、地域再生の小さな拠点となり、新たな「だいがくのたから」となることを願う。

大学時報

2025.09／NO.424

CONTENTS

74	72	70	64	56	50	44	38	34	32	16	10
											だいがくのたから 仙台白百合女子大学
											大学点描 国際武道大学
											巻頭言 「武道に学ぶ」志 松井完太郎
											視点 居場所としての女子大 南博文
											座談会 大学が創る、食の未来
											石田雅芳／入江彰昭／露久保美夏／有馬暁澄／(司会)山田健太
											特集 未来の自分を描く低年次キャリア教育
											成長にあわせた段階的なキャリア教育―『キャリアの立教』のキャリア教育― 阿部通明
											学生と社会をつなぐ支援
											―明治大学における低学年向けキャリア支援の実践と工夫― 住吉祥子
											自己成長と主体的なキャリア形成
											―実践女子大学における低学年次からのキャリア形成支援― 林鶴代
											未来の選択肢を広げるために―低学年からのキャリア支援― 久保ひとみ
											岩手で働くことは、岩手で暮らすこと
											―「地域×キャリアデザインプログラム in いわて」の取り組み― 船場ひさお／穴田光宏
											現在の学生の価値観とキャリア教育
											―学生の「不安」から紐解く低年次向けキャリア教育― 中島英里香
											ずいそう 地域構想プラットフォームへの道 山田啓二
											小特集 多様な分野における博士人材の活躍
											多様な分野で活躍する博士人材の育成
											―Double-Wing Academic Architecture― 森井英一

古代より中国で使用され、アラビア商人を経由して西方に広まり、中世ヨーロッパの航海に革命をもたらした羅針盤。表紙デザインには、社会の変化が著しい現代において、大学の“今”を映し出し、向かうべき未来をはかる指針とならん、という思いを込めています。



140	136	126	124	122	120	114	110	102	92	88	84	80
執筆者・出席者のご紹介(掲載順)	新会員代表者紹介	クローズアップ・インタビュー	加盟校の幸福度ランキングアップ《応援団編》	明日への試み	私の授業実践〜教育現場の最前線から〜	寄稿	寄稿	寄稿	寄稿	寄稿	寄稿	寄稿
142 私大連ニュース	144 編集後記	中京大学 スポーツ振興部 副部長 青戸慎司さんに聞く (聞き手) 外川智恵	何処から来て何処へ向かうのかー関西大学応援団の過去と今とこれからー 村井智史	変わりゆく応援団の「コマ」利他の心で紡ぐ人々の共感ー 木原高治	三位一体となつて、応援団再興へ 河原真也	「協同学習」で育む医学生への学びーダイアロジックな教育を通して見えてきたことー 小松誠和	メガネリサイクルを通じたグローバルな社会貢献活動 山本シャーリ	「大学院カーボンニュートラル副専攻」の挑戦ー 下川哲	産業界で活躍できる修士・博士人材の育成	博士人材の民間企業での活躍 加治佐一晃	博士人材活躍プランと今後の大学院施策 永見浩輔	博士人材の民間企業での活躍 加治佐一晃



「道」を知り、「道」をひらく









University Current Review

大学時報

2025.09／NO.424



「武道に学ぶ」志

松井完太郎 国際武道大学学長

本学創立者の松前重義が、国際柔道連盟（IJF）会長に就任した直後の1979年12月に、ソ連のアフガニスタン侵攻が起こった。しかし松前は、翌年に開催されるモスクワ五輪に日本代表を送る道を最後まで模索した。同時に、武道・スポーツによって世界を繋ぐため、1980年3月の（財）日本武道館常任理事会で本学設立の決議を得ている。本学の建学訓に刻まれた「武道に学ぶ」志は脈々と息づき、2022年以降もウクライナとロシア双方の留学生・研修生を受け入れ続けている。

居場所としての女子大

南博文 筑紫女学園大学学長

1. 女子大バッシング？

2023（令和5）年の6月から福岡県太宰府市にある筑紫女学園大学に学長として勤務している。浄土真宗の教えに基づく「人に寄り添う人を育てる」を教育方針とする優しい雰囲気の大学である。キャンパスの周りには「筑女の森」と呼ばれる里山があり、仏の手のひらに乗っかるような落ち着いた環境で学生と教職員との距離の近さが、大学の良さとして学生たちからも支持されている。

その優しい大学が、危機にさらされている。

言うまでもなく、18歳人口の減少というマクロな状況が教育機関を経営危機に陥れている背景があるが、それ以上に女子大であること自体に対する異議申し立てが社会の声として、きつく響いてくる。

学長に就任して女子大関連のニュースなどが目に飛び

込んでくるようになった。中でも大きなインパクトを感じたのが、坂東眞理子昭和女子大学総長の「変われぬ女子大なら淘汰」という見出しの日本経済新聞2023年8月5日付けの特集記事であった。大学関係者の中でよく引き合いに出された言説であり、ある種、女子大をめぐる世論の基調（トーン）を決めた発言であったと思う。そしてそれから約2年、淘汰の波はリアルに押し寄せてきている。中央教育審議会の新しい答申からも、中小私大の統廃合に向けた本気のギアチェンジが透けて見える。「どうする女子大？」という半分野次馬的な興味で騒ぎ立てられている感さえするマスコミ論調に加えて、政府は学校法人の統廃合へのチャートを描き始めている。こうした動向は、「外部環境」として大学経営に圧力を与える因子であるが、内部に居る当事者たちは、それに

どう向き合い、そこからどのようなリフレクション（自己省察）が生まれているであろうか？

本稿は、新米学長として「柔らかな文理融合による大学改革」を所信表明に掲げ、この優しい気質の女子大の未来形を教職員と共に探ってきた一人の当事者による報告である。まだ客観視できるだけの距離感がない、渦中にある者に見えた現場についての覚え書きである。

2. なぜ女子大であるのか？

この数年の女子大への厳しい目の中で、そして志願者・入学者が減っていくという現状から、あらためて問われたことは「なぜ女子大であるのか？」という自らの存在意義に関わるものである。女性教育のための機関の必要性が社会にとって自明ではないという現実である。

私学には建学の精神があり、創設者が立てた「何のためにこの学校を興したのか」についての理念がある。企業で言われる「パーパス」は、すでにこれらの理念に表明されている。日本社会にいまだに強く存在するジェンダーギャップを是正し、ジェンダーに関わる無意識のバイアスに備える教育を行うという目標は、今でも通用するはずである。

正攻法で女子大を弁護するならば、これらの女性のキャリア支援、生き方支援、リーダーシップ経験の提供という目標が、「なぜ女子大であるのか？」への答えとなるだろう。そこは今の逆風の中でも押し通していくべき指針であり、国公立・私立を問わず、女子大として生き残っている大学が特色にしている「売り」である。

しかし、「優しい」大学であるわれわれの場合、リーダーシップ養成を声高に掲げることへの違和感が、教員から職員からも上がってくる。「文理融合の先端をいく女子大にします」という新米学長の弁に対して、あるベテラン先生に教授会で言われたこんな言葉が印象に残っている。

「へふつう」の人が育つ組織が本物なんですよ」

含蓄に富む教育者の言葉だと思う。そのような教員を抱えていることが、この大学の魅力なのだと、外から入ってきた私にもなんとなく分かる。肩肘を張った勇ましい変革論をぶつけるのではなく、学生の日常にちゃんと腰を落ち着けて向き合い、彼女らと共にじっくり歩む。

「人に寄り添う人を育てる」大学の真髓がそこにある。でもですね、それだけだと学生が入ってきてくれないのです。その「良さ」を持続できるようにするには、ど

うすればいいのか。と、新米学長は悩む。

3. DoingからBeingへ

先にも述べたように企業経営でも「パーパス」に基づいた価値の明確化が大切だと言われる。有名なのは、アメリカの登山・アウトドア用品メーカーであるパタゴニア社の「私たちは、故郷である地球を救うためにビジネスを営む (We are in business to save our home planet.)」というもの。ここでは、どう経営するか以前に、自分たちが「何であるか」が問われている。パーパスは、「(社会的) 存在意義」と訳される。

大学として為すこと (Doing)、やるべきことは山ほどある。しかし、今問題とされるのは、私たちが社会から存在を望まれているかということ。

すなわち、あり方 (Being) が問われる。

女子大に、あるいは私たち、筑紫女学園大学に、社会の中で居場所があるのか、あるとすればその理由は何なのか、ということ。

これはきつい問いである。

これまであり続けてきた、というのは答えにならない。

それほど、社会の前提が変わった。

自分たちに「居場所があるのか」と先ほど書いた。実は、女子大の存在意義という問題を考えた先に出てきた答えは、この同じ「居場所がある」というフレーズに関わるものであった。

大学が提供できるメニューに、どれだけ「本学だけの強み」と言えるものがあるのか。もちろん各大学は、独自の教学内容や支援制度を設けることでしのぎを削っている。われわれ自身もそうである。女子大は、女性のキャリア形成に関して、特に優れた実績を持ち、その精度をあげてきている。

こうした様々な工夫を今後も続けていくことが女子大の存在意義を増すことは確かである。それらは、Doingに関わる前進である。しかし、それは共学であっても原理的には為しえることも言えそうだ。その差別化はむずかしい。

女子大に身を置いて2年間。学生たちのリラックスした「あり方 (Being)」をその内部で見えて思うこと。それは、ここが学生たちの居場所としてたいへんに優れた質を備えている場所であるという気づきであった。

たとえば、階段の踊り場や、カフェに置かれたベンチで

休憩時間に寝そべる姿。学内のトイレや渡り廊下、教室と教室の間の空間に対しても気配りが利いていて、なんとなく和やかな空気感がある。もちろん、こうした捉え方は、人それぞれであり、私自身の男性という属性がバイアスを加えているに違いない。

それにしても自然体でへふつうに居る彼女らの日常を見ていると、この大学が「器」として、居場所を提供していることは、けっして私の臆見目ではないように思う。

4. 筑女でよかった

1907（明治40）年を創立の時とする筑紫女学園は、福岡県内で2番目にできた高等女学校を前身とし、地元では「筑女」という名で親しまれてきた。のちにできた附属中高（筑紫女学園中学・高等学校）は進学校であり、そのブランド力もあってか短期大学時代に20倍という競争率を誇った時代も経験している。4年制大学に転換してから、文学部を中心とした教養教育を旨とする落ち着いたきのある人間教育と同窓生ネットワークの力で、「就職の筑女」といった定評を受けて女子大としての地歩を固めてきた。

なぜ、女子大であるのか、という社会からの問い直しに対して、ジェンダーギャップの話や、女性の理系分野への進路開拓といった、大きな物語を持ち出して語ることは学長の務めでもある。しかし、学生一人ひとりの等身大の物語はそれとはちがったところにありそうだ。

「筑女でよかった」という声を、卒業生から在校生からもよく聞く。その中身は各人各様であるだろうが、この大学が培ってきたふんわりと包むような、アットホームな雰囲気、なんとなく安心できる環境を醸し出していることがベースにあるように思う。何よりも、新米学長として身構えていた私自身が、「筑女でよかった」と感じている。

5. ネコの居る大学

何がどう「筑女でよかった」のか、自身でも分析してみているが、たとえば、という日常のエピソードが案外と本質をついているようだ。

たとえば、難しい議題の会議が途中休憩に入ったとき、さっきまで理詰めで書類の文言をめぐる議論していたメンバーが、学内に住んでいるネコの話をしている。餌やりの当番のことらしい。数匹居るネコを名前つきで話

題にしている。

キャンパスに向かう坂道と駐車場との間の空間にネコの餌やり場があり、学生、職員、教員が交代で世話をしている。近隣への迷惑にならないよう避妊手術をしており、そのための基金を有志で集めていると、帰りがけに



[写真]ネコとの共生

餌やりの現場に遭遇した私に職員がそっと教えてくれた。ネコの居る坂道は、「化粧落としの坂」と呼ばれている。勾配がきつく、授業の時間に急ぐ学生たちの汗がお化粧を落とす。このちょっとしたドラマの場所に、ネコが共存している。

「居場所」をデザインすることはむずかしい。そこが「居場所である」ことは、その人が決めることであるから。他者があらかじめ仕様書のように定めることができない。しかし、共同体が、日常感覚の中で相互に感じ合い、ある大切にしてきている「場所柄」の質があり、それを維持するということかたちで言わば無意識に「デザインする」ということはある。

ネコたちはこのような場所柄に敏感である。「筑女でよかった」とは言わないが、そこに居続けるという行動でこの場所を肯定してくれている。

6. 居場所としての女子大

変わらない女子大は淘汰される、そのプレッシャーの中で何を守り、何を変えるのか。「女子」という概念、社会通念そのものが変容していく現代社会において、ここ

が誰かにとって「居場所である」と感じられる環境の質を備えているとしたら、その価値を自身の存在意義の一つとして位置づけたい。その上で、時代変化に応じて柔軟に適應する大学として進化する。

柔軟に適應する方法論の一つに、情報テクノロジーをうまく使いこなす「手わざ」の習得が含まれるだろう。ハードな固い印象のデータ・サイエンスに対して、「ソフトサイエンス」という言い方で、人間っぽい情報技術とのつき合い方や、手を動かしながら身につける学びをデザインするものがこれにあたる。

あくまでも「私の居場所」を見つけていく手わざの一つとして情報を使いこなす、ことばを自分と他者とのコミュニケーションのすべとして上手に扱えるようになること。

共生の方法として、社会との柔軟なつき合い、他者との共存の仕方を学ぶには、そこが安心できる場所であることが欠かせない。その選択肢として、女子大が提供する「居場所」としての器の価値は、まだ十分に試されていないのではないか。

それを試す価値はあるはずだ。

※居場所の捉え方について、BeingとDoingの対比で理解する考えは、北山修著『自分と居場所』（岩崎学術出版社）ならびに住田正樹・南博文（編著）『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』（九州大学出版会）所収の北山修の「自分の居場所」の所論と北山氏による議義やパーソナルコミュニケーションに基づいている。